一番ヶ瀬康子教授退職記念号に寄せて

社会福祉学科 主任　小笠原　祐次

一番ヶ瀬康子教授が退官されることになった。本年３月をもって、本学の規定によって定年を迎えられる。

一番ヶ瀬教授は、本学、というよりは今日の日本の中で生活・福祉・文化関連学会や市民運動・女性運動などの分野での、最も重要な役割と位置を占め、影響を与えておられるだけに、そしてまた我々社会福祉学科にとっては、戦後の本学科の教育と研究を創り、発展させる上で最も中心的な役割を果たされ、現在の重鎮でもあられるために、教授が去られた後の空白の大きさについて推し量れないでいる。

一番ヶ瀬教授のこれまでの教育・研究、さまざまな市民活動での業績はあまりにも多く、輝く山脈をなしている。ここで私などがその紹介を簡単にできるわけではないが、知るかぎりでの主要なお仕事の紹介をしておきたい。

教授は、昭和20年に本学家政学部三類（社会事業専攻）を卒業され、その後さらに法政大学法学部に進学、そこを卒業されて昭和28年に本学家政学部社会福祉学科助手に奉職されて以来、今日まで本学社会福祉学科を創り育て、発展させる中心になってこられた。ことに昭和50年に文学研究科社会福祉学専攻を設置・推進する中心になり、後進＝女性研究者を育てることに多くの時間を割いて来られたのである。またこの間附属高校主事や女子教育研究所の主事などを兼任され、日本女子大学の総合的な発展にも大きな力を注がれた。特に人間社会学部の創設には中心となってこられ、初代の人間社会学部長の重任を果たしてこられたのである。社会福祉学科の発展だけでなく、日本女子大学の今日までの発展については、一番ヶ瀬教授をおいて語るわけにはいかない。

研究の分野においては、社会福祉の形成を歴史的な視点と社会構造的な視点からダイナミックにとらえ、位置づけることによって、社会福祉を学として成立させる上できわめて大きな貢献をしてこられた。その研究業績は次頁以降に紹介されている通りである。この社会福祉学への総合的な視点は、現在の社会福祉学科のカリキュラムにおける問題・政策・方法の三系列の学問体系として反映されている。

そしてその社会的評価は、日本社会福祉学会において昭和52年から58年の二期にわたって、女性初の代表理事に選出されたことに示されている。また日本学術会議会員に選出され、学術会議の中で社会福祉の意義と評価を広められた功績はきわめて大きなものがあった。ことに今日の高齢社会における最も重要な社会福祉援助としての介護については、社会福祉専門職の養成・確保の課題の最も中心的課題として、学術会議の中でいち早く取り上げられることによって、介護福祉士の制度化に重要な影響を与え、さらには、日本介護福祉学会の創設にあたっても中心となり、現在会長を勤められている。あるいは社会福祉と生活学の統合や福祉文化の発展など、多面的な視野で社会福祉（学）の発展に貢献されている力は、今日の福祉社会構築への中心であられることを示している。

今後とも後進の育成に力を注がれ、これからの社会福祉学科へのご指導、ご助力をお願いする次第である。

いつまでもご健康で一層のご活躍を心から願いつつ。

1995. 3.